



従容録に学ぶ (六五)

第四則 世尊指地

〔示衆〕

衆に示して云く、一塵を纒かに挙ぐれば、大地全て収む。匹馬、単槍も、彊を開き土を展ることは、便ち可なり。随処に主と作り、縁に遇えば、即ち宗たる底、是れ甚麼人ぞ？

〔本則〕

挙ぐ、世尊が衆と行する次、(他の脚跟に随つて転る。)手を以つて地を指して云く、「此の処、宜く梵刹を建つべし。」(太歳の頭上に、土を動かすべからず。)帝釈、一莖草を將つて地上に挿して云く、「梵刹を建つること已に竟んぬ。」(修造は易からず。)世尊は微笑む(賞罰は分明なり)。



縁に束縛されず自在なはたらきを展開できるような人は、いったいどんな人物か

『従容録』の全一〇〇則には、一則ごとに主人公である仏祖名と、その公案を示す言葉を組み合わせた題名がつけられています。たとえば、「臨濟真人」や「洞山常切」のように。今回は、第四則「世尊指地」でして、釈尊が主人公ですが、同様な則はほかに第一則の「世尊陞座」だけ。もつとも、釈尊の説法を編集した経典類がテーマになっている則は、ほかに数則あるのですが、釈尊ご自身が主人公の公案は意外と少ないですね。

その貴重な「世尊指地」は、釈尊と帝釈天についてのおもしろいお話。帝釈天とは、インドでは地上界を支配し、天上界を支配する梵天とともに、仏教の守護神とされています。まず、万松さんの「示衆」をみましょう。

空中にとぶチリゴミをわずかでもとりあげれば、その中に大地はみな収まる。あたかも、一騎に一本の槍で敵地に向かい、諸国を征服し領土を広げるようなもの。このように、至る所で自分が主人公となり、諸

な？

おおよそ、こんな意味です。これはけっして大風呂敷を広げた誇大妄想者の言動などではなく、すべての差別的相対的なスケールをはなれると、どんなものでも小さなものなのかに収まってしまふことをいうのです。こうした考えは華嚴経などでも説かれますが、これを「万法帰一」と表現したのは僧肇^{そうじやう}。

この方は、あのクマラジユウの弟子で、四世紀初めの大仏教学者ですが、とくに禅思想の形成には大きな影響を与えたといわれます。いま、万松さんは大小だの長短だのというスケールをやめた世界では、一ミジンの中にも全世界があるのだ、というのです。たとえば、「仏性」はたしかにそうですね。仏性に大小も長短もありません。なお、「一塵……全取」は、青原系統の人で洛浦元安という禅者のことば。

「随处に主と作る」^なは、臨済和尚の有名な「随处に主と作らば、立処みな真なり」を承けるもの。何ものからも自己が乱されず、自在なはたらきができるのは、禅の究極的なねらいですね。万松は「それはたれか？」と問う形で、暗に帝釈の妙手をほめているのです。

つぎに宏智さんの「本則」です。

釈尊が弟子たちと遊行の際に、大地を指して「ここに寺を建てるとよい」といわれた。



宏智が30年間住した天童山の仏殿現景

同行の帝釈は一本の草を取って大地に挿し、「もう寺を建てました。」釈尊はそれを見て、ニツコリと微笑んだ。

ただこれだけ。理解しておくべきことは、当時インドのお寺は「精舎^{しょうじや}」といい、今日の日本の寺とはかなり違う。ご祈祷や法事や葬斎や豆まきなどはせず、おもに修行と説法を行う道場でした。だから精舎を建てるなどの浄行は、大きな大きな功德を積むことではありません。

したがって、この本則に「著語」というコメントをつけた万松もそうですが、宏智じしんがつけた「頌」の部分でも、釈尊と帝釈の両者に讃辞をのべています。たとえば、釈尊は万徳円満であるから自然のままに俗世間で教化をされ、どこでも主人公となっている。これを補佐する帝釈天も、また大きく妙なる力量を発揮している、と。

このように、帝釈の力があってこそ、釈尊はいっそう光るのです。ちょうど、宗門では道元さまも瑩山さまも、それぞれ二代さまの力量によっていっそう尊崇されるのに似ています。これにひきくらべ、私たちの参禅会でも、レベルが高く道心の篤い会員さんの力量があればこそ、住職はどうやら体面を保持していただけるのであります。つまり、会員さんが主で住職が従ということになりましたが、それでも和氣藹藹ならば、と思います。

体験坐禅・托鉢

開智国際大学で出張坐禅

二〇一九年一〇月二六日。開智国際大学で三日目の出張坐禅を行った。指導に集まった参禅会員は合計七名。前日、大雨の中、松井さんの車に関連用具を積み込み、当日八時に集合、準備を整えた。当日朝、イングリッシュ・ラウンジ（＝茶室）に、坐蒲、受付台、坐禅や龍泉院に關したパンフレット、掛け軸などを整え、外に「坐ってみたら」と「坐禅体験！」と書いた案内のチラシを張った。

一〇時、チラシを持った広報担当が二名、正門前に行き、勧誘を行った。午前中に坐禅した方は一〇名。昨年は四名だったので大幅に増えた。最終的には二六名と昨年を四名上回った。北垣学長も坐禅された。

茶室入口に一名が受付を担当し、室内では椅子坐禅指導員一名、坐禅指導員二名とする割り振りを決めた。最初の参加者が入室したのは一〇時二〇分ころ。二名の男性は仏教系の学校に行っているのので、坐禅には慣れているとのこと。

次の参加者の男性一名は齋藤指導員が担

当。小畑二郎指導員の真似をして必死の指導ぶり。それも、二回三回と重ねるうちに指導ぶりも板についてきた。

子供の結跏趺坐にビックリ

広報担当の活動が功を奏したのか、比較的にコンスタントに参加者が入室してきた。坐禅指導員が少なかったのでフル回転。途中、息子さん二名を連れ来たお母さんが入室してきた。てつきり、お母さんが坐禅すると思ったら、十歳前後の息子さん二名が坐禅し、お母さんは付添人だった。下のお子さんがいきなり結跏趺坐できたのには指導員二名とも驚いた。



坐禅案内を柱に貼り付け

「リラックスできた」、「心が落ち着いた」、「気持ち良かった」、「集中できた」など、肯定的な感想の参加者が多かった。

ただ、中には二分ほど坐っただけで「ダメです」と言い残して立ち去った青年もおり、指導員も哑然としていた。坐禅時間は一五分だったが、回数が多く、参加者はもとより、指導員にとっても充実した一日だった。

チラシ配りでは比較的年配者は受け取ったが、若者はあまり受け取らず、世代間の格差が目立った。「たった一五分。一生に一度くらい坐禅したら」と通販の大安売りのような呼びかけを行ったが…。

国際交流団体との協力も？

終盤近く、正門近くでビラ配りをしていた松井さんに、「おいでよ柏へ！」という柏に外国人をまねく団体の人が近づき、意見を交換した。坐禅をしている場所を紹介、そこで五十嵐さんが懇切な説明をするのと同時に、英文のパンフレットを渡すなどした。今後、外国人を招くうえで協力の芽が生まれるかも知れない。

四時ころ店じまいして帰る時、北垣学長にお会いした。お礼を言うとともに、「来年もよろしく」とお願いした。

古賀ゼミ生が上山、坐禅体験

二〇一九年一〇月二五日、開智国際大学古賀万由里先生とゼミ生の合計一〇名が上山し、「坐禅体験」を行った。古賀ゼミの方々も坐禅を体験したのは昨年に続いて二回目。今年は一二名の予定だったが、体調不良などで二名が来られず、一〇名になった。

昨年は八名だったので、二名増えた。うち、男性が六名、女性が四名。ネパール、中国、ベトナムなどからも三名参加した。

坐禅は一三時五五分から始まり、二〇分坐り、経行五分、その後、坐禅一五分の合計四〇分。坐禅終了後、御老師の法話があり、茶話会を行って意見を聞くなどして、一五時三七分に終了した。

最初の坐禅では終了時に三名が立ち上がる事が出来ないなど、苦労した人が多かったが、二回目の坐禅後は全員がスムーズに立ち上がることが出来た。「慣れてきた」感じだったが、やはり、全員が頑張ったといえよう。御老師は法話で次のように述べられた。「我々はみんなに生かされています。今日、坐禅が出来たのはそれを支える人がいたからです。大雨の中の坐禅となり、皆さん『忘れ



坐禅後、御老師から法話

られない記憶』になったと思います。掃除、食事、就眠などすべてが修行で、生活と修行は一つです」

これに対し、古賀先生は次のように感謝の言葉を述べた。

「我々は発展のことしか考えていませんが、温暖化で台風が襲来、発展ばかり言っているべき時ではなく、『何を指すか』を考える時が来ています。坐ることで、その機会をつくって頂き、ありがとうございます」

松戸市交流会

二〇一九年十一月九日、「松戸市交流会」の方々を対象とした「坐禅体験会」が行われました。交流会からの参加者は男性七名、女性一名の計八名。参禅会からは小畑代表幹事以下六名。指導や進行などを行いました。明石師も指導されました。

午後二時開始の予定でしたが、交流会の方々の到着が予定より早かったため、予定を早め、小畑代表幹事の説明を開始いたしました。小畑代表幹事は「坐禅の心得」など全体的なことを話され、その後、五十嵐さんより坐禅の基本的な坐り方、調身・調息・調心などの説明がありました。

坐り方のモデルは河本さんが行いました。実は、私（吉澤）は龍泉院参禅会の坐禅体験会への参加は初めてでした。小畑代表と五十嵐さんの説明を興味深く聞けたとともに、河本さんの坐り方も大変勉強になりました。

参禅会の方の坐禅を正面から見るとなかなかありませんが、河本さんの立派な結跏趺坐を拝見し、「いつかは自分も」と思いましたが、体が硬いので目標達成はまだ先になりそうです。

歳末助け合い托鉢

恒例の歳末助け合いが東葛坐禅クラブの旗の下、二〇一九年一月一五日午後一時前から三時まで行われました。参加者は一七名と過去最多。寄付金も六万〇六二七円と、昨年を六九四〇円上回りました。寄付金は全額、朝日厚生文化事業団に寄贈しました。

始めての随喜

柏市 明石 直之

私はこの度、当山の参禅会が主催する歳末助け合い托鉢に初めて随喜させて頂きました。托鉢自体は初めてではありませんが、経験する度に思うことがあります。それは、「私個人から施しを受けるに値する者なのか」と云うことです。

もちろん、浄財は私するものでなく、寄付させて頂くのですが、施しをした方はおそらく私がお坊さんだからと云うことで喜捨したと思うからです。托鉢はそうした意味で、「自身の不徳や浅学不才を省みさせてくれる、またとない機会」と考えています。

最後に、僧侶ならば施財の後、「施財の偈」と云って次の偈文を誦えます。「財法二施功



柏駅で托鉢する会員と御老師

徳無量 檀波羅蜜 具足円満」。詳細な意味は

別にして、「財を施す人も、お経を誦し法を施す僧も、お互いが施し合う修業」ということです。法を施すといっても、短いお経を誦えるだけの若輩者の私ですが、この様な経験をさせて頂いたことに心より感謝いたします。

甘かった？助け合い

流山市 市川 信彦

年の瀬に、道行く人たちの善意をお手伝い…気づけば募金箱にはそこそこ浄財が…と

軽く考えていた私が甘かった…。

私は今回、初めて歳末の募金活動に参加させて頂きました。首から募金箱を下げ、柏駅前のコンコースに立ちました。周りには国連WFP支援の呼びかけや、チラシ配りの方などが元気に声を上げています。でも、私は照れ臭くてあんな声は出せません…。

人々は慌ただしく通り過ぎ、募金どころか気にかかる様子もありません。「これはいけない」と思ううちに、ちよつとずつ声も出るようにはなっていました。それでも二時間の間に入れて頂いた方はお二人だけ…。

その内の一人は坂牧さんでした。激励を兼ねて駆けつけて来て、寄付して頂いたのです。大感謝です。寄付頂いたお二人には後光がさして見えました。

世間のサイフの紐は固かった！「ちよつと冷たいなあ」と感じたりもしました。でも、そう思うのって、逆に身勝手だなと反省しました。なにしろ、師走で皆忙しいですし、あやしい団体だったら！?という心配も人によつてはあるかもしれません。

たぶん、微力ながら善意のお手伝いをさせて頂けたことをありがたいと思うべきなんでしょうね。道行く皆さん、良いお年を！

柏市の生涯学習グループ

正月の余熱が治まった二〇二〇年一月二三日、「柏市中央公民館生涯学習グループ」の方々を対象にした坐禅体験会が行われた。

参加者は男性五名、女性一〇名の合計一五名。支援する参禅会員は小畑代表幹事以下一〇名。珍しく小雨が降る寒さ厳しい中で坐禅だった。

一〇時少し前、小畑代表の挨拶後、雲堂へ。坐禅は二〇分の一炷。坐禅希望者二名に対し指導員一名が担当。かなり余裕のある指導だった。

高齢者が多く、当初、大半が椅子坐禅を希望していたが、刑部さんが「雲堂に入ったら、坐蒲を使った坐禅に変わる人が出るかも」と言っていたら、案の定そうになった。ほとんどが坐蒲を希望、椅子坐禅は一名だけだった。

坐禅後、大悲殿で、御老師による法話「山崎弁栄〜鷺野谷が生んだ大正の法然〜」が約一時間行われた。この中で、御老師は大略こう述べられた。

「上人は柏市鷺野谷（旧沼南町）に安政六年（一八五九年）生まれ、松戸市小金東漸寺で得度されました。明治二七年、インドの仏

跡を参拝、ブツダガヤから菩提樹三本を持ち帰り、うち一本が龍泉院にあります。上人は字が神業で、米粒に般若心経二六二字を書き、説法中に『南無阿弥陀仏』と米粒に書いたと伝えられ、左右の手で書いたといわれています。

絵も上手で、龍泉院にもあります。また、龍泉院で説教されたこともあり、その時使った前机が今も龍泉院に残されています。念仏についての説法は迫力があり、聴き手の前にジリジリ寄るので、聴き手は押されて敷居や建具にまで下がったとのことですよ」



真剣に、初心の坐禅に取り組む

その後、茶話会が行われ、参加者から「小中学校の時、坐禅をしており、また坐禅をしたいと思っていたので念願がかなった。ただ、足が痛かった」、「初めての坐禅だった。最初は呼吸が整わなかったが、慣れてくると呼吸がリズムカルになった」、「貴重な体験だった。懇切丁寧に教えてもらい、感謝している。機会があったらまた坐禅をしたい」、「二〇分では短すぎた」、「警策をしてほしかった」、「弁栄上人の話は二度と聞けないと思う、一生懸命聞いた」などの声があった。

一二時に終了するはずだったが二〇分ほど超過、寒さを忘れる熱い会だった。



坐禅後、御老師から法話

山内動静

御老師、今年も眼蔵会で講義

永平寺では一二年も毎年、春と秋、約一〇日間づつ、修行僧を対象に『正法眼蔵』の一部を講義する「眼蔵会」を行っています。昨年の春と秋にはご存じの通り、御老師が『正法眼蔵』中、最も難しいといわれる『海印三昧』を講義されました。

眼蔵会実は一年だけではなく、「講演者が辞退するまで行く」ことになっています。御老師の前は古坂御老師が六年間、講義され



永平寺で講義なさる御老師

ています。今年は『空華』を講義するのとこととで、龍泉院でも、目下、提唱されています。これも大変難しい章ですが、修行僧に講義なさる前に、我々は聴くことが出来ました。参禅会に参加している「余禄」ともいえます。御老師は「歳なので何年できるか分からないが、今年も行いたい」とのことです。もちろん、体調もありますが、是非、長く続けられ、その前に我々に提唱していただきたいものです（写真は永平寺から提供されました）。

杉が倒木、山門が被害

二〇一九年一〇月の台風一五号と一九号は日本に大きな被害をもたらしましたが、龍泉院にも大きな爪痕を残しました。

小林さんによると「門の前の杉が一本、坐禅堂の裏の杉が四本倒れた」とのことです。門の前の杉は山門の上に倒れ、屋根を破壊しました。龍泉院では、すぐ補修にかかりましたが、鬼瓦が壊れ、「それを愛知の窯元で作るのには半年かかる」（御老師）とのことです。保険に入りましたが……。この二月に予定通り補修されました。



坐禅堂の裏の四本のうち、三本は松井、小林、河本の三氏が処理しましたが、大きな杉は難しく、業者に処理を頼みました。幸い、山門の横の大きな杉二本は倒木を免れ、景観に大きな変化はありませんでした。山門前の杉はかなり虫害などがあり、作務班では「危険」と思っていたようです。龍泉院は歴史のある寺院であり、境内も広く、多くの樹木が繁茂しています。他にもそのような木があるかもしれず、今後も適切な管理が必要な気がします。それにしても一〇月一八日の作務の参加者は三名。その後、若干増えてはいますが、お世話になっている龍泉院の美しい景観をどう保持するか、真剣に考える必要がある時がきている気がします。

年番幹事の雑感

我孫子市 刑部 一郎

平成最後の年番幹事の事は一月一日に前幹事と引き継ぎを行ってから始まった。

年番幹事の事は「参禅会の活動が円滑に行われるようにすること」につきる。定例参禅会、各種行事、施食会の世話など、年番幹事の守備範囲は広範囲にわたる。特に、坐禅堂も建設されてから、その管理も加わり、数年前に比べると仕事量は倍増している。

定例参禅会の日は、定刻の九時よりかなり早く、七時三〇分に二名の年番幹事は集合、大悲殿の準備、坐禅堂の清掃、準備を行った。また、行事ごとに大悲殿、坐禅堂の鍵を最初に開け、終わると火気、電気、戸締りを調べ、責任を持って施錠して最後に帰るといいう大きな責任がある。

(一) 新年会

行事は最初に二月の新年会から始まる。参加者は一四名。例年は二〇名くらい参加するが、今年は少ない。御老師とお酒を飲みながら語れる貴重なひと時なので、大切にしたいと思う。また、各人の今年の抱負も聞くことが出来るのが楽しい。

(二) 涅槃会、降誕会

配役の人選はほとんど固定化されている。高齢化を考えると、役割内容の書類化や若手への伝承を早急に行う必要を痛感する。

(三) 一日接心

今年から一夜接心に代わり、一日接心となった。そのためか三三名が参加して盛況。一日接心にして成功であったと思われる。

(四) 施食会

参禅会から一五名が参加して、お手伝いした。午前中の本堂の設営は写真付きの手引書を作成すれば、もっとスムーズに出来ると思う。また、設営作業には危険な高所作業もあり、安全に対する一層の注意と配慮が必要と思われる。

(五) 成道会

令和元年は一二月八日に開催でき、二七名の参加であり、多かった。配役の人達の集合が遅く、リハーサルが出来ず、ぶっつけ本番のためか、ところどころ進行がおかしなところもあった。参禅会の人にはプロではないので、やはりリハーサルが必要と思われる。御老師との問答は少なかつたように思われた。日頃疑問に思うところをぶつけることが出来る良い機会なので、もっと活用していただけたら

と思う。

(六) 歳末助け合い托鉢

一二月一日に柏駅東コンコースにて歳末助け合い托鉢を行った。一二月の寒さとなかなか募金が集まらない中で、二時間、声をはりあげ、募金を行ったが、良い修行の場と考えられる。参加者は一七名で例年より多く、若手も結構参加し、参禅会も頼もしくなってきたようだ。

(七) 一二月参禅会例会

例会後約一時間、四グループに分かれ、大掃除を行った。大掃除終了後、お寺よりお餅が振舞われた。お餅を食べて、「ああ、これで年番幹事の事も終了した」との実感が湧いてきた。

各行事が終了すると、書類の整理、金銭の会計処理等を行う必要がある。また、来年の幹事のために、作業内容をまとめて報告書に残している。少しでも新しい人が幹事の仕事をしやすいようにするため、過去の経験から考えてである。

年番幹事をやっている、忙しさと大きな責任で一年間があつという間に過ぎる。一年が終わると大きな荷が下りたというような、ほっとした感じになる。

成道会

禅堂の前にある露のついた白い花。朝早くから料理をして下さった典座さん。そんな光景が印象的だった二〇一九年二月八日の朝、第三七回成道会が行われました。

行事では、拈香法語や般若心経の読経などが行われ、次に問答があり、その後、御老師による法話がありました。また、二〇年、参禅されてきた相澤さんが表彰され、御老師から「非思量」と書かれた額が手渡されました。堂頭は御老師、維那・殿鐘は小畑節朗、侍者は小畑二郎、持香は斉藤正好、副堂は明石直之師、先導は刑部一郎の各氏でした。

【問答】

問：二〇年、坐禅を組んできたが、初心の弁道をもつてこられたか。

答：普段の地道な行事が弁道である。

問：徳山は「言うも三〇棒、言わざるも三〇棒」といっているが、その面目とは。

答：私は何にも言い得ない。

問：自未得度先度他で仕事、学問もやったつもり、いかに。

答：その通り。私も学問と実践一体となってやってきた。



参禅会員が多数参加、盛会だった成道会

問：「自」とはなにか。

答：自分と他を越えた意味である。

問：脚下照顧とは。

答：流山でコツコツ坐禅を普及されている姿勢そのものである。

問：私は七五歳。まだ働きたい。これからの生き方はどうあるべきか。

答：七〇代真つ只中で歩む自分が充実した生き方をしていると考えるとよい。

問：今年の永平寺はどうであったか。

答：張りのある一日一日であった。

問：「物事に拘るな」とあるが、仕事上お金に拘ってしまう。どうしたらよいか。

答：それに振り回されないことである。

問：体のあちこちが不調だが、心の乱れによるのか。

答：それもあるが、体を動かした方がよい。

問：病の大黒様に恩返ししたいが。

答：時に、言葉をかけて頂ければ。

【法話】

開智国際大学で出張坐禅をした時、龍泉院で保有している、達磨さんが描かれた掛け軸を飾りました。その絵は巨海東流（一八五三年没）という江戸後期の曹洞宗の僧が描いたものです。東流は井伊家の菩提寺、世田谷の豪徳寺の住職になり、幕末の大老井伊直弼の師となりました。

井伊直弼は水戸浪士に襲われて斬殺されましたが、泰然自若としていたそうです。この達磨の絵は、示寂直前に書かれたもののように、「縁」を感じ取ってもらえればと思います。

◇

◇

法要が終わると、典座を務められた小山、佐藤、松井、坂牧さんから心のこもった料理が出されました。

新年会 楽しい語らいで

二月二日、午後一時半から新年会が我孫子駅前「はなぜん」で開かれました。参加者は一五名。

次々に並ぶ料理を美味しく頂きました。冒頭、御老師はこう述べられました。

「二日前、故美川さんの四九日の法要の依頼を受け、営んでまいりました。浦和まで同行した添田さんと、帰路、様々なことに思いをさせ、語り合いました。」

また、五十周年記念事業に関して「前回、寺宝展の警備費用が数十万円と重い負担」であり、次回は計画時に「宝蔵」との併用などの検討を示されました。

恒例の参加者スピーチは、一番手刑部さんの「求道と伝道」の話が一〇分間超となり、その後は「一言勝負」。しかし、皆さん、一人一人が滋味あふれる参禅への志を述べておられました。アマダクジでは、昨年から参加されている、川村さんが金賞の宝船を射止めました。御老師提供の計六品に加え、小畑代表がGODIVA二箱を提供。お二人のご厚意にはひたすら感謝。ハズレた方は残念。筆者はGODIVA。愛妻満面笑み。

涅槃会

山門の両側にそそり立っていた大木、向かって左側の木がありません。昨秋の台風一五号、一九号にも無事だったのですが……。

山門の様子が変わっても、涅槃会の二月一五日は曇りの穏やかな日和でした。

今回は初めて儀式を行う会員が多かったのですが、戸惑う方もいましたが、リハーサルで初めて務められる方に明石師が作法を丁寧に指



本番前のリハーサルと準備

導してくださいました。

御老師、明石師、参禅会員二名で本番涅槃会は約四〇分、今回は初めて五体投地を参加者全員で行うなど新趣向もあり、無事、円成しました。

涅槃会が終わった後、御老師が恒例の法話をなされました。今回は涅槃図について語られ、次のように話されました。

「この涅槃図は昭和五七年、本堂上棟の時、初めて須弥壇の中にあるのを知りました。領主の本多氏が寄贈してくれたもののようにです。中央に釈尊が描かれ、下に悲しみに卒倒した弟子の阿難がいます。涅槃図には猫がいるものといないものがあります。左上に釈尊を迎えに来た摩耶夫人が描かれています。右の場合もあります。沙羅双樹、赤い袋、動物も多く描かれています。描かれた時代によって異なります」

如月の望月のころに示寂することを願った西行忌も今日です。涅槃図には望月も大きく描かれていました。

涅槃会の後、一炷の坐禅を組み、茶話会が行われ、龍泉院心づくしの五色団子をお土産に頂きました。門前には「徒に生きず只管に生きよう」とのお言葉がありました。

想うこと

生かされて生きている

我孫子市 清水 秀男

「大いなるものにいだかれあることを けさふく風のすずしさにしる」

この歌は昭和を代表する禪の高僧である山田無文老師（一九〇〇～一九八八年）が若かりし頃、結核で闘病中の開悟ともいうべき歌です。無文老師は一四歳の時、故郷三河から上京。人生の究極の目的は何か、我何をなすべきかと煩悶され、さまよえる羊の如く色々な宗教の門を叩かれました。

最後にチベット仏教研究の泰斗河口慧海師の教えに接し、感動して仏門に入り、戒律の厳しい修行生活を約二年送られましたが、無理がたたって結核にかかり、医者にも見放され、故郷に戻り、絶望のどん底の中で療養を余儀なくされました。

初夏のさわやかな朝、老師は久しぶりに寝床から離れ、縁側に坐り庭を眺めていた時、気持ちの良い涼しい風が頬をなぞた。その時、ふと「風とは何だろう」と考え、風は空気が動いているのだと気がついたという。

空気というものがあつたのだ。生まれて二〇歳を過ぎるまで、空気に育てられながらその存在に気づかなかつた。それにも関わらず、空気は寝ても覚めても休みなく抱きしめてくれていたと気がつくと、涙が止まらなかつたという。その時の心境を次の様に述懐されています。

「自分だけがこの世のみんなから見棄てられたかのように、いともさびしく病と憂いにやせ細ってゆくわたしにも、絶対にわたくしを見離さない、大きな味方があることに気がついたので。わたくしを抱きしめて離さない真実のあることを知ったのです。…もうわたくしは一人ではない。さびしむことをやめよう。悩むことをやめよう。この大きな力にひたすら身をまかせ感謝をささげよう」

その感激のほとばしりが冒頭の歌です。それ以来、無文老師は回復に向かわれ、禪の道に入り、分かり易い言葉で海外も含め、禪の普及に務められました。私は学生時代、老師と坐禅・提唱などのご縁を頂き感謝しています。

私も拙い次元の低い経験ながら、生かされて生きている。この有難さを実感したのは、一二年前、前立腺がんの全摘手術を受け、

その合併症で苦しみ、その後三年間の間に大小七回の手術を受け、闘病生活を余儀なくされた時です。

自分の体で言えば、自分の意思に無関係に心臓は生まれてから休みなく血液を全身に送り続け、胃腸は食べ物を消化し続け、腎臓・膀胱は老廃物の排泄機能を果たし続けている。さらにさかのぼれば約三七兆個の細胞が存在し、お互いに助け合いながら、調和を保ち機能している。

自然との関係で言えば、空気、水、太陽の恵みを頂き、食べ物は何の命を頂かないと生きていけない。人との関係で言えば、一人では一日たりとも生きていけない。多くの人のお蔭でかろうじて生きている。

まさに大自然の不思議な力とご縁の恵みによって「生かされて生きている」のだと、病縁によって初めて気づかされました。

しかし、煩惱多き私は、知らない間に自分だけで生きていると傲慢になりがちな日々を送っています。無文老師の歌を何度も何度も味わい、「生かされて生きている」真実に常に立ち返り、感謝と共に一日一日自分が出来ることを丁寧一杯やっていく日暮しをせねばと、思いを新たにしています。

縁（えん）

〜遠い日の出来事 曹洞宗との出会い

白井市 佐藤 修平

遠い過去に遡って、あの時の出来事は、現在の自分と「縁」があったのではないかと思えることがある。

父が他界したのは、私が四五歳の時。この時、佐藤家が「曹洞宗」であることを知った。六十代初めまで、私にとつての「曹洞宗」「道元」は教科書の鎌倉新仏教に関わる記述程度であった。

父の十三回忌法要を営んだ後に、他界した母の一周忌を終え、札幌から仏壇を移送した。その開眼供養を、椎名御老師にお願いした。縁で参禅会を知り、後日、参加。七年間が経過した。

今、遠い昔を振りかえると、「曹洞宗」と密に接した一時期があったことが思い返される。大学生活のため、上京した私は、横浜市鶴見区東寺尾の、高級住宅街の一軒の洋風離れで下宿生活を送った。

二食賄いつきである。庭に来る大きな鳥は『ブッポウソウ』と夫人に教えられた。家の近くの石段を降りると、「總持寺」の古い墓

地に出た。さらに歩くと広大な境内、そこには多くの女子学生が歩いていった。

一九六七年から吹き荒れた学生運動は一九六九・一・一九の安田講堂事件を経て、七〇年安保・沖繩返還運動を前にしほみ始めていった。

一九七〇年夏休みに、国鉄の周遊券を手に北陸・中部への一人旅に出た。キスリング（大型ザック）に寝袋、食料、コンロも持参した二週間である。

上野からの夜行で福井へ、そして「永平寺」へ直行。半日を過ごし、金沢経由羽咋駅へ。初日は、羽咋駅の軒下で寝た。翌朝、「永光寺」を興味もなく散策。ただし、ザックを背負ってひたすら歩いた。日蓮宗「妙成寺」の伽藍、五重塔に圧倒された記憶がある。

能登半島に入り、門前町の「總持寺祖院」を訪れた。私の旅は舳倉島、金沢、そして飛騨高山と続いた。十二日間で十日間は外で寝た。

この年、民族大移動と云われた「大阪万博」の真最中、日本列島はこの観光地も閑散としていた。夏休み後半、札幌に帰省した私は、友人と待ち合わせ、すすき野を散策し寺を訪れたが、くぐった門には「中央寺」と記され

ていた。

学生時代の一時期、図らずも曹洞宗の寺院（總持寺、永平寺、永光寺、総持寺祖院、中央寺）と密に接していたのである。

その後、友人と借りた、東京山谷ドヤ街のアパートで、一年間を送り、異なる目線で社会を見つめていた二一歳の私。

参禅二〇年

振り返り、これからを思う

柏市 相澤 義彦

一月の作務の際、御老師より「相澤さん、参禅に通われて二〇年になりましたよ」と、声をかけて頂きました。

「えっ！そんなのまだ先では？」とのやり取り。「本当にそんなに経っていたのだろうか？早いものだ」、これが、偽らざる実感でした。

この二〇年を私なりに振り替えれば、参禅があり、わずか半年ほどで、御老師からのお勧めで「在家得度」。これにも「いくら何でも。坐って間もないのに……」。と思っではいまましたが、後にこれが正道であると気が付きました。



参禅 20 年の記念揮毫をかざす相澤さん

「得度」し、お釈迦様の弟子となり、御老師の弟子となって、法名を頂き、日々の教えとともに、「名に恥じぬように生きてこそ、弟子であり、得度の意味がある」と気が付きました

頂いた名の意味や背景をうかがって、さらに理解することができたのです。今となれば、「六〇年前、六歳のころに得度をしていれば、さらに良かったのではないか」とも思っております。

この二〇年で思い出になったことは、やまほどありました。なかでも、旧山門から新山門への落成、参禅を始めたのがほぼ同時期の伊藤幸道さんの（永平寺への）出家式、そして、坐禅堂（雲堂）建設準備委員会活動と、龍泉院直管での雲堂雨だれの建設工事などです。

雨だれの建設直管工事は地元の染谷さんのご協力、ご指導も頂き、松井さん、小山さん、山本さん他の皆さんと汗を流し、身体を痛めたものの、無事に完工しました。

今になり、雨だれを眺めれば、その様が蘇るよい出来事であり、「やればできる！」の思い出です。

これからの思えば、御老師のお言葉「参禅会は参禅道場であり、道場は修行の場、サロンではない。真剣に命がけで坐りなさい」を肝に銘じて生きたい。

永平寺より頂いた「道場認可の札」を汚すことのないように、雲水・学生そして弟子として、坐禅に、作務に、この先二〇年、新たな発心をもって励んでいきたいと思っています。

（合掌）

三町勲さんを悼む

柏市 五十嵐 嗣郎

三町勲さんがご逝去されてから早や半年が経とうとしています。

三町さんが参禅会に入られたのは昭和五八年で、この年には徳山さん、高野さん、中嶋さんが同じく入会されています。

『明珠』一号によると、三町さんは日立精機で、新製品開発の設計責任者をされておられたそうです。そのためか、技術開発や世の中の新しい動向には関心が高く、定年後もCAD・CAMの技術や3Dプリンターに取り組み、中小企業診断士の資格を取得されて、企業経営のコンサルをされたりしていました。七〇歳になってテニスも始められました。

このように新しいことの知識吸収とこれまでの人生経験から、多くの知見をお持ちになられているため、茶話会の席では参禅会の運営や世上の在り方などについて、必ず貴重なご指摘を一言述べられるのが常でした。

ご趣味としてはカメラへの造詣は大変深く、写真展では何度も受賞され、三町さんの撮られた石仏の写真は大変人気が高く、成道会ではくじに外れて何度も口惜しい思いをし

たものです。カメラに強いことから、三町さんには一夜接心や成道会などの集合写真をお願いしていましたが、一番印象に残っている作品は『明珠』五九号―坐禅堂建立記念号―の表紙を飾った写真です。締め切りが迫っている中、なかなか「雲堂」の額ができてこないのです。

そのため、毎日のように龍泉院に來山し、額が掛かっているか確認していました。ある日、額が掛かっているのを見て、すぐに三町さんに連絡を取り、坐禅堂の写真を撮ってもらうようにお願いしました。

しかし、その日のお天気は生憎あまりよくなく、写真を見ると空がどんよりして坐禅堂がくつきりと見えないのです。そこで、お天気の良い日を待って再度、写真を撮ってくださいるようにお願いしました。

再三再四の撮り直しにも三町さんは文句一つ言わずシャッターを切ってください、最後に早春の冷たい青空をバックに、白壁の美しい坐禅堂がスツと立っている見事な写真を仕上げて下さいました。改めて三町さんにお礼を申し上げるとともに、ご冥福をお祈りいたします。

(台掌)

美川恒子さんの思い出

流山市 添田 昌弘

去年の一二月二一日、参禅会員の美川恒子さんが突然亡くなった。一月の参禅会には我が家に迎えに来てもらい車に乗せてもらった。参禅会が終わってから、一緒に食事をし、我家でお茶を飲んで帰った。

坐禅の途中、体調が良くなく、坐禅堂から部屋に戻っていたとは聞いたが、そんなに具合が悪そうではなかった。

その数日後、買い物に出かけて、具合が悪くなり、タクシーで帰宅したが、タクシーを降りたとたんに倒れて、タクシーの運転手が救急車を呼んでくれたという。いつも元気だったのであまり心配もせず、退院したら食事でもしようと思っていたが、亡くなったという連絡を受けた。

ご主人の美川武弘氏は、大学時代のクラスメイトで、長い付き合いである。夫婦一緒に旅行に行ったり、食事に行ったりしてきた。最近、ニュースになっている、新型コロナウイルスが発症したクルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号で数年前、横浜から北海道の各所に寄港し、樺太まで一緒に行った。友人の女

房達だけでハワイにも行っている。

参禅会の二五周年記念の中国旅行に友人として、参加しないかと誘ったら、夫人の方が乗り気で一緒に出掛けた。旅行だけと思っていたが、参禅会にも出席したいということ、浦和から、夫人の運転で龍泉院まで来るようになった。御老師や坐禅の仲間と気が合ったのであろうか。

それからもう二五年位になる。運転の出来ない武弘氏を乗せて通ってきた。その後の参禅会の行事にはほとんど全て参加している。成道会や一泊参禅、そして、研修旅行などである。

研修旅行では「良寛さんを訪ねる旅」、「東北震災慰霊の旅」、「中国五山を巡る旅」、「シルクロードの旅」などなど。夫婦で在家得度も受けられた。

ご主人の武弘氏は恒子さんに全く依存していたので、これから生きていけるのか心配である。一緒に旅行に行っても、朝起きると、「ママ、俺の下着」とか「靴下」という。自分でも出来ないのだ。淋しくなったが、ゆっくり休んで下さることを祈るばかりである。

(台掌)

沼南雜記

【定例参禅会・年間行事】

- (一) 内は座談の司会者
- 一〇月二〇日 (吉澤 誠氏) 二九名 (石澤 健氏)
- 一二月二四日 三三名 (中原 悦男氏)
- 一二月 八日 (中 原 悦男氏) 二七名
- 九月二三日 三四名

龍泉院参禅会簡介

【参 禅】

- 一、定例参禅会
 - 日時 毎月第四日曜九時(初参加者は八時半) 来山、正午解散
 - 坐 禅 口宣、坐禅、経行、坐禅の順
(坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分)
 - 提 唱 木版三通、開経偈、『正法眼蔵』の提唱
自己紹介・喫茶・座談
 - 座 談
 - 自由参禅
 - 日 時 毎月第一日曜と第二土曜日
九時から一〇時半時まで(入堂九時まで、退堂自由)
 - 坐 禅 ※会費無料
年齢・性別など一切不問、初心者には懇切に指導
- 【年間行事】
 - 一、一日接心 本年は六月二日、四炷の坐禅と提唱等
 - 一、成道会 本年は一二月八日、坐禅二炷・法要・問答・法話等
 - 一、他の行事 涅槃会(二月一五日)、花祭り(四月八日)、施食会(八月一六日)、歳末助け合い鉢鉢(一二月)、団体参禅受け入れ、歳末煉払い(一二月例会後)
- 一、作 務 毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等
- 【会報誌】
 - 一、『明珠』(四月八日と一〇月五日発行)
 - 一、『口宣』(年一回)
- 【ウェブサイト <http://www.nyusenin.org/>] 『明珠』『口宣』のバックナンバーをご覧になれます

―成道会―

幹事 小畑 節朗氏

刑部 一郎氏

吉澤 誠氏

● 一二月一五日 一七名 歳末助け合い

● 一二月二三日 三三名 (茂木 伸氏)

令和二年

● 一月二六日 三三名 (山本 三郎氏)

● 二月 二日 一五名

● 新年会―

● 二月一五日 一二名

● 涅槃会―

● 二月二三日 二六名 (門脇 弘氏)

【自由参禅】

● 九月 一日(九名)、二四日(二五名)

● 一〇月 六日(二四名)、二二日(二四名)

● 一二月 三日(二四名)、九日(二二名)

● 二月 一日(二〇名)

● 一月 五日(九名)、二二日(二三名)

● 一月 二日(九名)、九日(二四名)

【奉仕作務】

● 九月 六日 一四員、二〇日

● 一〇月 四員 二員、一八日

● 一二月 一日 九員、一五日

● 二月 六日 一四員、二〇日

● 一月 三日 一員、一七日

● 二月 七日 一五員、二二日

【坐禅普及委員会】

● 三月二四日(七名)

● 五月二六日(九名)

七月二八日(八名)

【編集後記】

▼御老師はじめ皆様の御蔭で、参禅会五年目に入りました。深く感謝申し上げます。(近江)

▼フェア・トレードという言葉がある。ココア、お茶など開発途上国の生産品を適正な価格で買おうというもの。開智国際大学の学園祭で、フェア・トレードの紅茶を買ったが、濃く、おいしかった。(岡本)

▼新型コロナウィルスが流行。八十代超の高齢者の致死率が高い。少子高齢化社会で寿命が更に伸びると、社会保障費で財政は完全に破綻。天界からの警鐘なのか。(修道)

▼喜寿を迎えた私の身辺が慌ただしい。骨折、認知、死亡。明日は我が身!自強術体操を毎日行うことを決心し、いまのところ続いている。(坂牧)

▼最近、マイクロコンピューターを購入し、小さなモータを動かしてみました。モータはほぼ同じタミングで動きます。このように、再現性のある機械と比べて人間は再現性がありません。ですが、すべての人が唯一の存在であることを時折忘れそうになります。(市川)

●発行/天徳山龍泉院 千葉県柏市泉81
●印刷/東港出版印刷株式会社 渋谷区渋谷2-7-7
●04(7191)1609
●03(6803)8470